

盛岡市の地場産業「ホームспан」のPR支援 ～ホームспан・リボーン・プロジェクト～

人文社会科学部人間文化課程（芸術文化）／教育学部中学校教育コース（美術）
ヴィジュアルデザイン研究室学生チーム

指導教員：教授 本村健太（人社・芸文）

序

これまで「みちのくあかね会」による「ホームспан」（羊毛を使った毛織物）は、市街地に近い盛岡市名須川町にある古い木造の建物の中で作られてきた。みちのくあかね会は戦後、夫を失った女性のための授産施設（社会福祉施設）として始まった。（図1）昭和33年に「盛岡婦人共同作業所」が発足し、昭和37年にはホームспан販売のために「株式会社みちのくあかね会」が設立された。この経緯は、設立60周年を迎える今日に至るまで、製作・運営のすべてが女性だけで行われている由縁でもある。令和4年6月に、みちのくあかね会は大慈寺町に移転することになり、新たな門出を迎えている。また、岩手県は、ホームспанを国の「伝統的工芸品」に指定すべく、国に対して申請する予定となっていた。ここには将来的にホームспанを新たな「岩手ブランド」として発信していく可能性が秘められている。このような注目が高まるこの機会に、若い学生の目線で「リボーン」（再生）というテーマで情報発信に取り組むことで、伝統工芸の全国発信や販路開拓につなげていく。



図1：盛岡市名須川町にあったみちのくあかね会（記録撮影：本村健太・指導教員）

岩手大学人文社会科学部／教育学部のヴィジュアルデザイン研究室学生チーム、そして卒業研究として小野寺日菜珠（人文社会科学部4年）が実施した「盛岡市の地場産業（ホームспан）のPR支援に関する制作研究」の取り組みについて以下に報告したい。

1. 本研究課題について

（実施計画・方法）

まずは、本研究計画に興味を持って関わる担当学生を複数集めてグループを形成して、卒業研究、または関連分野の体験学修としての枠組みを明確にしていく。この学生グループを

令和4年度地域課題解決プログラム

中心に、みちのくあかね会の渡辺未央さん、盛岡市商工労働部ものづくり推進課の藤井克磨さんと協議を行いつつ、具体的な実施内容の詳細を詰めていくことにする。

近年、SNS (YouTube、Twitter、インスタグラム、TikTok 等) を活用して消費者とコミュニケーションを行い、ファンの獲得や購買につなげていくデジタルマーケティングが広く行われている。しかしながら、盛岡市内の地場・伝統産業の中には、技術的・時間的問題から十分に SNS を活用できていないという声も多いという。したがって、比較的に SNS の活用度の高い世代である学生たちの目線で、みちのくあかね会およびホームスパンの PR 活動を行っていく。具体的には、SNS で活用できるバナー画像、イベントにおける DM・チラシなどを制作したり、学生によるホームスパン体験をレポートしたりする PR 支援となる。今回は、盛岡市のホームスパンが人間模様の鍵となった小説、伊吹有喜著『雲を紡ぐ』のファン層も意識しながら、「リボン」（再生）をテーマに展開する。

上記は当初の計画であったが、みちのくあかね会の移転作業や学生側の制作能力の準備の状況に応じて協議しながら活動内容を決定していくことにした。

〇方法

協議により、本研究課題の実施内容については大きく次のように行うことを計画した。

1. 移転前の作業場を写真や動画で撮影し、SNS で発信できるコンテンツとすること
2. SNS 上や販売所で使用できる画像や POP などを試作すること
3. 学生が実際にホームスパンを体験し、それをもとに PR 活動につなげること
4. 上記においてブランディングに関する検討を行うこと

このように、学生たちの若い世代の視点を生かして課題に取り組む計画をしたが、コロナ禍において活動が制限されることも理解し、感染防止を最優先にして気をつけながら実施することとした。

II. 今年度における研究活動の経過について

(結果・考察)

〇研究活動の打ち合わせと移転前のみちのくあかね会の撮影

みちのくあかね会は令和4年に設立60周年を迎えるとともに、6月に移転を控えており、その準備作業が始まる前に現地の記録写真・動画が必要になるため、令和4年度地域課題解決プログラムの採択が決定する前の時点で、すでに3月からみちのくあかね会の渡辺未央さん、盛岡市商工労働部ものづくり推進課の藤井克磨さん、指導教員の本村健太教授の三者で協議をして撮影(図2)の作業も進めておくことになった。(本村教授の撮影した写真や動画はプロジェクトに参加する学生たちの共有素材として使用する。)



図2：名須川町の旧みちのくあかね会での記録撮影（撮影：本村健太）

地域課題解決プログラムの採択が決定し、令和4年6月7日には、人文社会科学部2年生の橘鈴茄も本村教授とともに現地の見学と撮影に参加した。

○移転後のみちのくあかね会の見学と卒業研究等の打ち合わせ

・令和4年7月27日（水）

みちのくあかね会の大慈寺町への移転が終わり、新たな拠点での活動が開始されたところで、小野寺日菜珠が渡辺未央さんと見学および卒業研究に関する打ち合わせ（図3）を行った。学生自らがホームスパンの体験を行い、それをもとにPR用の冊子を卒業研究として制作することにした。

その後、小野寺日菜珠は冊子用の取材として8月9日（火）に「ジョブキッズ」（小学生向け職業体験会）の見学、工程（紡ぎ・織り）の見学・撮影を行った。



図3：大慈寺町に移転したみちのくあかね会にて打ち合わせ（撮影：藤井克磨さん）

移転先の住所：

株式会社 みちのくあかね会

〒020-0828 岩手県盛岡市大慈寺町 10-34 あさ開内

令和4年度地域課題解決プログラム

・令和4年10月13日（木）

後期になって、小野寺日菜珠は改めて卒業研究や学生によるホームスパン体験（手づくり村のはたおり教室にて）についての打ち合わせを渡辺未央さんに行った。

・令和4年10月14日（金）

本研究の取り組みについて、岩手大学を紹介するテレビ番組「ガンダイニング」の取材を受けることになり、その打ち合わせを広報室（岩手大学総務広報課広報グループ）の担当者および映像制作スタッフと行った。（小野寺日菜珠・本村健太）

○ホームスパン体験会

・令和4年10月24日（月）

盛岡手づくり村の「はたおり教室」（みちのくあかね会運営）でホームスパンの体験（1回目）を行った。参加者は、卒業研究として取り組む小野寺日菜珠（4年）、染織を主に制作している及川亜美（3年）、ガンダイニング学生レポーターの澤口花咲（3年）。（引率・記録撮影：本村健太）

今回は、各自が好きな色の糸を選び、渡辺未央さんに教わりながら「花瓶敷き・小」を織り上げる体験をした。（図4）



図4：「花瓶敷き・小」のホームスパン体験（撮影：本村健太）

参加学生の感想：

ホームスパン制作は初めての体験でしたが、つい取材だということを忘れて黙々と制作してしまうほど、楽しかったです。刺繍など、糸を使う他の制作とは違い、玉結び・玉留めが不要な点が一番印象に残りました。圧をかけると繊維が絡むという羊毛特有の性質を感じることができました。完成したあと、他の方の作品と比べてみると、それぞれの個性が色選び・織り方に出ていてホームスパンの面白さを感じました。（小野寺日菜珠）

令和4年度地域課題解決プログラム

今回、私以外の方はほとんど初めてのホームスパン体験だったと思うのですが、初心者の新鮮な感想を聞くことができ良い刺激になりました。授業以外の制作は基本一人で作業していることもあり、複数人で感想や発見したことを話せたのは純粋に楽しかったです。他の方が「織るのって楽しい」「もっとやってみたい」と言っていたのを聞いて私も嬉しくなりました。他の参加者の方と一緒に体験することで、「作品にその人の人柄が出る」と実感できたのも大きな学びでした。（及川亜美）

・令和4年11月23日（水）

小野寺日菜珠が「ホームスパン糸紡ぎ」の体験を行った。（引率・記録撮影：本村健太）
長年使い込まれた味わいのある紡毛機（ぼうもうき）を使って渡辺未央さんに教わりながら糸紡ぎを行ったが、ペダルを踏むタイミングや力の入れ加減が分からず苦戦した。（図5）しかし、この体験はパンフレットの作成にも（内容として）役立つことになった。



図5：「ホームスパン糸紡ぎ」の体験（撮影：本村健太）

体験の始めに、糸紡ぎの説明を受けた。ただの羊毛は強く引っ張ればほろほろと毛がちぎれるが、細くねじったものは引っ張っても簡単にはちぎれなくなる。このねじった部分が長くなると糸と呼ばれるようになる。つまり、糸紡ぎとは羊毛に撚りの力を加える工程だといえる。

現在のみちのくあかね会では、電動の紡毛機が使われているが、今回の体験では、木製の紡毛機を使用する。車輪のようなはずみ車の下にはペダルがあり、それを踏むことでははずみ車が回転し、羊毛を糸にする撚りの力になる。

説明を受けた後は、紡毛機のペダルを踏む練習を行った。手でははずみ車を回して勢いをつけ、ペダルをタイミング良く踏んで回転を保ち続ける。踏むタイミングを間違えると、回転が止まったり、逆回転になってしまう。感覚をつかむまでは、はずみ車を回す棒（コンロッド）の動きを目安にペダルを踏むと回転を保つことができる。

実際に紡ぎに入ってから1時間は、手元で羊毛を引き出す動きと、ペダルを踏み続ける動きを同時に行うことに苦戦した。足に集中すると手元がおろそかになって糸の撚りが強くなり、逆に手元に意識を向けるとペダルを忘れてしまう。（小野寺日菜珠）

・令和4年11月26日（土）

ホームスパン体験において一番難易度の高い「ホームスパンマフラー」に挑戦した。参加者は、小野寺日菜珠（4年）、及川亜美（3年）、橘鈴茄（2年）。（引率・記録撮影：本村健太）（図6）

初回の花瓶敷き体験では、「トントン」と音がするほどしっかりと打ち込みをしながら織ってきたが、マフラーの場合は、やわらかい手触りを目指していく必要があるため、糸同士の感覚を少し開けて、ゆるやかに空気の入る余地を作ることになる。



図6：「ホームスパンマフラー」の体験（撮影：本村健太）

参加学生の感想：

今回のマフラーは前回の花瓶敷きよりも長く、1日で完成できるのかと不安でしたが、スムーズに制作できました。家での洗濯を終えた後のマフラーは、糊も取れより柔らかい手触りで、ずっと触っていたくなります。ホームスパン製品は、使用するほどその人に馴染んでいくそうなので、これからの寒い季節に使うのが楽しみです。（小野寺日菜珠）

今回マフラーを織る体験をしてみて、実際に販売されているホームスパン作品を制作する方々の技術の高さを実感しました。マフラーの耳（緯糸の折り返しの部分）を真っ直ぐ揃えることや、緯糸の感覚を一定に保ちながら織ること等は、熟練の技術があるからこそできるものなのだと改めて感じました。完成してから何度か使ってみたのですが、とても軽くて柔らかく、ホームスパンならではのもちもちとした弾力とウールの風合いを楽しめて、お気に入りのマフラーのひとつになっています。（及川亜美）

○岩手大学紹介テレビ番組「ガンダイニング」での活動紹介

本研究活動について取材を受けた内容が、岩手大学紹介テレビ番組「ガンダイニング」で「地域課題解決プログラム～ホームスパン・リボン・プロジェクト～ヴィジュアルデザイン研究室×みちのくあかね会」と題して放送された。IBC 岩手放送からの放送は令和4年12月13日（火）夕方6:55～6:58、再放送が令和4年12月14日（水）午前0:55～であった。

岩手大学ホームページでの告知：

<https://www.iwate-u.ac.jp/about/public/gandaining.html>

現在、YouTubeでも発信されている。

ガンダイニング 2022：地域課題解決プログラム紹介

<https://youtu.be/N88oBCDesTE>（学生レポーター：澤口花咲）

○みちのくあかね会とホームスパンのPR動画

みちのくあかね会とホームスパンの撮影動画を用いて、他の地域課題と連携しながらPR動画を制作した。SNSで公開した動画は、みちのくあかね会の公式アカウントで渡辺未央さんからの一言コメントをいただいた。

YouTubeでの発信：

<https://youtu.be/oq4cHv4w42s>
<https://youtu.be/X1krTm85JMU>
<https://youtu.be/3m7JgmlsSSE>
<https://youtu.be/XSXE36Jqn1E>
<https://youtu.be/cDZnj6xBZI8>
<https://youtu.be/EiRj-8aGFB0>
<https://youtu.be/XshKkKgzWhE>
<https://youtu.be/kJOPtUqxdTE>
<https://youtu.be/WHX21EzoEzo>
<https://youtu.be/dwMoGe8aBxE>
<https://youtu.be/Tq4sitdhUWw>
<https://youtu.be/LXVPRkJ6vkg>
<https://youtu.be/ywEk5m-EyM0>

みちのくあかね会（渡辺未央さん）からのコメント例：

<https://twitter.com/akanespun/status/1610479420325900289>
<https://twitter.com/akanespun/status/1611514468730810368>
<https://twitter.com/akanespun/status/1611515843103559680>

○みちのくあかね会とホームスパンを紹介するヴィジュアルツールの試作

本村教授の担当する授業の履修者で、ホームスパン・リボーン・プロジェクトに興味をもった学生がPR活動に役立つ「ヴィジュアルツール」としてのロゴマーク、POP、チラシ、バナーなどを自由に発想して試作した。（図7、図8）



図7：ロゴマークの提案（制作：伊藤未来）



図8：ヴィジュアルツールの提案

(制作：村上志保、佐藤袖妃、石山咲来、菅野さくら、笹谷成実、管莉伶子)

○卒業研究「盛岡市の地場産業〈ホームスパン〉のPR支援に関する制作研究」

ここで、小野寺日菜珠が卒業研究として展開した内容を紹介する。

設定理由：研究室の地域課題解決プログラムに参加し、盛岡の特産品を扱う企業のPR支援を行った経験がある。また、刺繍作品を制作しており、以前から糸を使う工芸品としてホームスパンに興味を持っていた。卒業制作研究として転換期を迎えるホームスパンに関わり、PR支援を行うことで、地元文化のさらなる発展の助力になりたいと考え、卒業制作として地域課題を選択した。

卒業制作作品：みちのくあかね会はショップや体験会の他に、冬期に東京で出張販売を行っている。よって、来店した方に渡せて場所をとらない小さいサイズの冊子を制作する。みちのくあかね会の渡辺未央氏への取材から、ホームスパン製品は50代以上の世代に利用されることが多いことがわかった。岩手の地域文化であるホームスパンを後世に残すためには、若い世代や、ホームスパンについてあまり知らない層へのアプローチが必要だと考えた。そこで、本研究ではホームスパンを知らない若者(20代~30代前半)をターゲットとした作品を制作する。内容は、ホームスパンの制作工程や制作体験とする。体験記事に初心者ならではの感想を入れることで、ホームスパンを身近に感じてもらう効果を出すことができるのではないかと考えている。また、制作体験の記事を入れることで、みちのくあかね会で過去に制作されてきたパンフレット・本との差別化を図る。そして、ヴィジュアル面に力を入れアートブックとしての側面を持たせることで、手に取りたくなる一冊を作る。(図9)

制作作品「つむぐ、おる、つながる」(150mm×150mm、全12ページ、Illustrator)



図9：制作作品「つむぐ、おる、つながる」

表紙～裏表紙

若い世代をターゲットにしているので、ポップな印象を与える黄色をメインに、はっきりとした表紙を制作した。また、ホームスパンの素材となる羊毛から連想し、羊をデザインに取り入れた。粘土で作ったような3D調の造形にすることで、色味やターゲットに合ったポップな雰囲気を目指した。

ホームスパンができるまで(p1~p2)

ホームスパン製品の工程をアイコン化し説明している。ホームスパンの工程は複雑であるが、読者がイメージしやすくなるように、文章とシンプルな図を組み合わせた。また、みちのくあかね会で作られている本やリーフレット・ホームページでは、写真を使用して工程の説明がされている。今までの制作物との差別化のために、写真ではなく図を選択した。

ひよこレポート①花瓶敷き体験(p3~p4)

10月24日(月)に盛岡手づくり村での花瓶敷き制作体験の感想をまとめている。文章の内容は、①体験の簡単な概要②制作途中の所感③できあがった際の感想という3つの要素で構成されている。特に、②制作途中の所感に重きを置いて執筆した。読者が機織りやホームスパンに対してイメージしやすくなるように、比喩表現を用いることを意識した。また、完成品はぜひ自分で体験したときに見てほしいという考えから、制作途中の写真のみ使用している。

ひよこレポート②糸紡ぎ体験(p5～p6)

11月23日(水)に盛岡手づくり村での糸紡ぎ体験の感想をまとめている。読者が飽きないように、前ページと文章の配置を変えて冊子の構成にメリハリをつけた。

ひよこレポート③マフラー体験(p7～p8)

11月26日(土)の盛岡手づくり村でのマフラー制作体験の感想をまとめている。文章は、左上から右下に文章を読むように配置した。流れる様に文章を読んでもらうために、段落の最後の数文字と、次の段落の最初の数文字がつながるように配置している。

あとがき～奥付(p9～p10)

冊子を制作した感想や、取材・制作でお世話になった方への謝辞を載せている。濃いグレーを基調としたデザインにすることで、内容だけでなく視覚的な面からも他のページと差別化している。

卒業制作研究の成果

本研究で制作した冊子について、みちのくあかね会の渡辺未央氏からは、ホームスピンの工程を説明するとき、手書きのイラストや写真のものは存在したが、今回のアイコンのような図解はなかったので新鮮でわかりやすいという感想を頂いた。また、体験レポートの文章も読みやすく、制作途中の所感が良いという評価を頂いた。

今回制作した冊子は、みちのくあかね会の店頭に設置され、来店した方や、制作体験に参加した方に配布される。また、SNSでも発信され、ホームスパンを知ってもらうためのPRにつながったといえる。

岩手大学卒業制作展での展示

本研究の成果は「岩手大学卒業制作展 2023」にて展示公開することによって、来場者にもホームスピンの情報を提供する機会となった。(図10)



図10：卒業制作展での展示の様子

岩手大学卒業制作展 2023

(岩手大学 人文社会科学部 人間文化課程 芸術文化専修プログラム卒業予定者有志)
令和5年2月15日～19日

令和4年度地域課題解決プログラム

盛岡市民文化ホール 展示ホール

本展覧会については、IBC 岩手放送でのニュース、岩手日報、盛岡タイムス、河北新報からの取材と報道があった。

なお、本小冊子は、みちのくあかね会の店頭にも置いていただいた。

みちのくあかね会ツイッター (@akanespun) :
<https://twitter.com/akanespun/status/1613816356490858496>

〇さいごに

冊子の構成・文章・デザインを一人で手がけるという経験は今までなかったため、知識不足ゆえに制作時に難しいと感じることが多かった。しかし、何度も案を練り直して制作したからこそ、目的であった、若い世代にホームスパンを知ってもらうための冊子を作り上げることができた。この経験から、順序立てて問題を解決する大切さを学ぶことができた。また、60周年という節目の年に卒業制作研究という形で携わることができ、地域文化への理解がさらに深まった。

卒業後は、岩手県内で地域社会や特産品に関わる仕事をするため、本研究での経験を活かしていきたい。本研究で制作した作品が、若い世代のホームスパンへの理解が深まることへの助力となることを期待したい。（小野寺日菜珠）

みちのくあかね会のホームスパン・リボーン・プロジェクトによって、その工芸品の魅力、そして、そこに関わる人々の魅力が、世代や性別を超えてさらに世の中に浸透していくことを祈願しています。

[謝辞]

本研究プロジェクトに関して、打ち合わせや研究活動に際して、たいへんお世話になった「みちのくあかね会」の渡辺未央さん、盛岡市商工労働部ものづくり推進課の藤井克磨さんに心より御礼申し上げます。